

新しい働き方を先取り 構造家・高見澤孝志

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ハシゴタカ

構造家の高見澤孝志さんの事務所名は「ハシゴタカ建築設計事務所」。このネーミングは、名字の漢字「高」から来ているようだ。「高」の字が「高」の異体字で、通称「ハシゴタカ」と呼んで区別するのに使う通称とか。それをストレートに社名にしたのがユニークだ。1977年に長野県南佐久平郡に生まれる。建築との縁は、母方の祖父が自営で建設業を営んでいくらい。現場や作業場を遊び場にしていったのが、広い意味での建築に進むきっかけになったかもしれない。実は、今も佐久平市民で、自宅があり妻子が住む。子育ての環境にと生まれ故郷を選んだ。ウィークデーは単身東京で仕事に全力をあげ、週末は家族との生活。これは、新型コロナウイルス発生前からのスタイル。上野に近い入谷の事務所は、進行中のプロジェクトの模型でいっぱいらしい。近くに住まいを持ち、新しい働き方をすでに実践しているのです。

■中田捷夫研究室

東京理科大学理工学部では意匠設計志向だった。建築家・小嶋一浩さんからの授業が印象に残る。「それなのになぜ構造に？」覇志堂の質問に、「中田捷夫教授（当時）の特別講義を受けたのがきっかけ」。高見澤さんが構造の分野で生きていくことを決め、程に面白かったそうだ。構造で行くと決め、自由な雰囲気も気に入って中田研究室へ入る。就職は氷河期だったので中田先生の紹介でNCNへ。構造家の播繁さんの事務所へも出入りして勉強した

り、SE工法をマスターした。ところが、2年くらい経つとルーティンワークに飽きたりなくなってきた。義理堅く紹介者の中田先生に辞める意思を伝えたとこ、少し経って「事務所にポストが空くので入らないか？」と誘いの電話があった。そして、10年間を中田捷夫研究室に在籍することになる。入所してすぐに1万m²の戸田市立芦原小学校（設計／小泉アトリエ+C+A）の担当のひとりになったとは驚き。「本誌でも掲載した「開かれた学校」ですよ」と覇志堂。「中田捷夫さんはウエットな人柄、フラットな師弟関係でいてくれた。構造に対する考え方が明らかに変わった」と、感謝する高見澤さんなのでした。

■現場常駐

特に思い出深いのが、2012年にI.M.Peiが設計した、滋賀県のMIHO美学院中等教育学校の構造設計および監理。中田捷夫研究室が構造設計したMIHOチャペル、神慈秀明会カリヨン塔（1990年）、MIHO MUSEUM（1997年）に続いてであった。現場には「一生に一度出会えるかどうかの好機だった」。クオリティの高い建築のために、構造設計者を常駐させるプロジェクトだったのだ。車で40分の琵琶湖の湖畔に寝泊まりして、2万5千m²の敷地に点在するI.M.Pei設計の建物をつくるために1年間を過ごす。高齢なペイ自身とは数回お会いしたことが、今も高見澤さんの誇りなのです。

■梯子を登る

中田捷夫さんに影響されて取った国家資格の「技術士」。独立してみると、構造一級建築士・一級建築士にも増して生きて、技術コンサルタントなど仕事の幅が広がる。仕事の幅が広がる。RC造の設計や木造の設計にも詳しく、現場の経験から得た監理にも強い構造家だ。個性的な若い建築家と保育園や住宅など協働しながら、日本工学院の講師も13年間続けている。さらに、一段二段と活躍の梯子を登り続けている構造家なのです。

